

鬼神病因論と呪術治療からみる中国古代文化

—「鬼交」を例として—

(要旨)

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D170414
氏名：孫 瑾

本論文は、「鬼交」という病いを中心に、医学と民俗との二つの視角から、古代中国の医学思想と民俗文化を論述するものである。

『黄帝内経』を初めとする経験医学理論が成立してから、呪術系治療法の大部分は医学文献から排除されるようになった。しかしながら、当時の医学では治療できなかった病気は中国伝統医学の歴史においてどの時代までも存在していた。それらの病理解釈に鬼神病因論の要素が残されてきた一方、治療法としても医術的なものと呪術的なものが共に医書に多く収録された。

このような病気の存在は中国思想文化の領域においては二つの面の意義がある。一つ、それらは当時医学分野における変動要因の解明と繋がることが考えられる。経験医学理論と医術治療によって解決できない病気は、医学界でそれらに対する思索が暫く続いてきた。その過程が当時の病気知識の変遷を表していることは注意に値する。もう一つ、それらは医学世界と民俗文化の世界を繋ぐ架け橋のような存在であることも考えられる。医術治療があまり効き目のないものであってこそ、民間においては呪術治療が大いに発揮される余地があったのである。それを解析することは当時の民俗思想の解明にとって非常に役に立つ方法と思われる。

残念ながら、このような病気を中心とする研究は未だ為されていない。魏晉から唐代までの呪術医療の状況に言及するものが屢々見られるが、呪術系治療法そのものを解析して、それと中国思想文化との繋がりを掘り出すというような論説はほぼない。本論文は、経験医学理論を系統化した初期、巫の要素が医療から大いに離れた後、依然として鬼神病因論が医書に見られる「鬼交」という病気を研究対象とする。それに関わる中国古代の医学思想と民俗文化を明らかに示すことを目指す。

第一章においては、後漢から六朝乃至隋の間における「鬼交」を考察することによって、伝統医学が成立した初期に、鬼神病因論と医学理論が共在し、呪術と医術治療が併存していた様相を示す。まず、症状群の比較を通して、「鬼交」の病名が誕生した前に、その病症が『黄帝内経』において「狂」の類いとされていることが確認される。患者が一般の人に見えないものを見、一般の人に聞こえないものを聞くということはその代表的な症状であることが明らかになった。

次に、「鬼交」という病名において、「鬼」と「交」とがそれぞれどのような意味合いであるかを解明することによって、その病因解釈に鬼神病因論と気の医学理論とが混在していることを論じる。「鬼」については、民間において強い生命力を持っている『論衡』訂鬼篇の説、すなわち人間と交わってその病気を引き起こす「鬼」が妖怪になっている六畜、また山野にある妖怪であるということを紹介した。また『論衡』や『諸病源候論』などの記述に基づいて、「交」とは鬼気と患者の気との交わりであり、「鬼交」とは人間の場に侵入した鬼気が人間自身の気と交わる一方、それを押し付けるようになっている状態の病気である、ということを示した。

そして、『肘後一百方』や『諸病源候論』に収録されている呪術治療の例を中心に、その中に含まれる呪術要素の意味を解析することによって、当時の伝統医学に見られる鬼神病因論の治療思想を解明する。医家は医術治療で解決できない病気に面する時に呪術治療を求める傾向にあったということを踏まえて、医学理論が成立したというにもかかわらず、「鬼交」のような病に対する病因解釈と治療には巫の特徴が大分残っていたことを示す。(以上第一章)

呪術治療が重要視されることは医術治療の失敗を同時に意味する。しかしながら、「鬼交」に対する医学界での思考が定まらず、魏晉から唐までの医書にはその病気を解釈するための様々な努力が見られる。それらを通して、当時の病気知識の変遷の一側面を解明して伝統医学思想の空白の一角を埋めることができる。第二章においては、すなわち六朝から唐までの間に行われていた医家の「鬼交」解釈を考察する。

まず、「鬼交」が初唐の医書において「注」の類いの病気に関連付けられるようになった背景を明らかにするために、『諸病源候論』の「注諸病」を中心に、いわゆる「注」病の特質を考察する。「注」は後漢において伝染する病気とされていたが、六朝末期になると、定義の拡大化に伴って伝染性の病気の外に根治できず再発する病気をも指すようになったことを論じる。「鬼交」が「注」の下位症状とされるようになったのは、その病因不明、難治また完治できない特徴によるからであると解明できた。

次に、六朝から唐に至るまでの医書に記されている「鬼交」、「注」或は「傳尸」などを検討して、「鬼交」が「注」の類いの病に結び付けられるようになった経緯を明確にさせる。その背景には、病気への知識が不安定であって、伝統医学が文化的要素と強く絡み合っていたことがある。医学理論で解釈しがたい病症また難治の病が「注」のような類いに一括される傾向があった一方、「鬼交」のような難病を解釈するために、それをほかの様々な病気の下の症状としてしまう事情が存した、ということを示した。

最後に、養生医学の分野で六朝の房中家に述べられていた「鬼交」説を中心に論じる。『玉房秘訣』など六朝以降の房中書では「鬼交」が「陰陽不交」の弊害論と結びつけられて、その病症が患者と鬼との交合によるものと解釈されていることが確認された。この解釈が『千金方』など後世の医書及び民間における「鬼交」への理解に影響を与え続けた。特に、民間の治療に「還精」などの房中思想が反映されていることは、『夷堅志』の事例によって確認された。(以上第二章)

医学文献などにおける考察によっても分かるように、「鬼交」は民俗の世界と密接に繋がっている。次に民俗文化の視角からこの病気を検証する。

第三章においては、『夷堅志』に記されている宋の民間の「鬼交」関係の事例を中心とし、民俗医療の視角から、それらにかかわる古代中国の民俗文化の各方面を解析する。まず、症状の記し方が「鬼交」の病に対する民衆の理解を直観的に示す。民間で最も注目されていたのは「鬼」の存在を現す心理的症状であるが、男性の場合は、体の衰弱を現す生理的症状は精液の消耗に繋がれて患者と「鬼」とが交わることを間接的に示すため、男性

の用例において最も一般的で重要視される、といったことが確認された。

次に、民間で行われていた多様の治療方法については、道教系治療、城隍・土地神の信仰に関わる治癒、仏教系治療、漢方医による治療、民衆自らの治療行為といった分類によって説明する。「鬼交」の伝播に重要な役割を担っていた信仰治療者は、「鬼交」という思想を発揚し、また利用した者であった。信仰治療のほか民衆自らの治療行為は、だいたい病因とされる「鬼」を消滅する方法であるが、女性の用例に交わる相手が「神」とされる場合には、その機嫌を取り結ぶ方法も見られる。

最後に、「鬼交」に関わる民俗文化の最も豊かな内容、交わる相手の「鬼」に対する設定を分析する。男性の場合には「死んだ婦人」「動(植)物妖怪」「女性の像」、女性の場合には「動(植)物妖怪」「木客・五通・山魃」「神」「死者」「塑像」という設定をまとめることができる。中でも「動植物妖怪」の設定は『論衡』の時代の考え方に関わり、「神」の設定は睡虎地秦簡『日書』の時代に遡られるということが明らかになった。また、宋代当時の変容として「鬼交」が婦人の妊娠に繋がれるようになったことについても論及した。

(以上第三章)

第四章においては、歴史文献の記し手によって言及されなかった点を提示するために、民間で現存する「鬼交」の呪術治療に対して実地調査を行い、伝世文献を中心に論じてきた成果と比べて検討する。

第一節では、江蘇省中部沿海踰門村の巫女・香童を対象とし、鬼神の存在を直観的に示す症状、すなわち患者は自ら鬼霊や神仙が見える、その声が聞こえると言う、或は周りの人から見ると、患者が一人であるのに誰かと一緒にいる振舞いをするといった病症に対する呪術治療を調べる。この種の病気に対する巫女の病因解釈及び治療行為について、病因の鬼神を駆除すべきものとする事と、自分が神仙に選ばれることをその病因とする事との二つのパターンをまとめた。伝統医学文献には前者しか採用されないのに対して、後者は完全にシャーマニズム的治療、すなわち民俗医療の領域にしか属しないものである。

第二節では、実地調査で見取った、「鬼交」の患者が巫女に成長したという現象を出発点とし、エリアードなどのシャーマニズムの先行研究に論じられている成巫の兆候や巫の特徴を「鬼交」病症と比較することによって、「鬼交」はシャーマニズムで成巫の契機や巫の能力と見なされているということを示した。(以上第四章)

本論文は、文化関連の病気を巡って中国古代の思想文化を解説するものである。「鬼交」のような病気が一つの社会の思想と行為と深く関わっていることを示した一方、それが病気としてどのように認識されるかのことはその社会文化にどの程度依存するのか、異なる社会においてその様相も異なるように見えるのか、それぞれの異なる部分の外に人類社会で共通する性格もあるのか、といった新しい問題を提起した。これらは筆者の次なる研究課題でなる。